# 2009年度『凛々子賞』受賞校の紹介

カゴメは、これからも子どもたちにとって「凛々子」がよりよい栽培体験の場となるよう、
当活動の充実を図る目的で、毎年「凛々子栽培レポート」を募集しています。
先生方から届くレポートには、カゴメが知り得なかった子どもたちのたくさんの発見と成長、
また、ご指導に当たられた先生方のお知恵や工夫など、たくさんの貴重な情報が含まれています。
これらはカゴメが当活動を続ける上での励みとなっており、また、全参加校で共有することで、
より多くの子どもたちに充実した栽培機会を提供できると考えています。
2009年度は応募総数62通の中から、
次に紹介する５校を『凛々子賞』として選出させていただきました。
各校・園の詳しい取り組み内容は、ウェブサイト（右ページ参照）に公開しています。
貴校・貴園の栽培計画のご参考として、ぜひご一読ください。

**大阪府和泉市立**
**あさひ保育園**
**5歳児／23名**

テーマ

## 凛々子物語
### ～毎日が収穫～

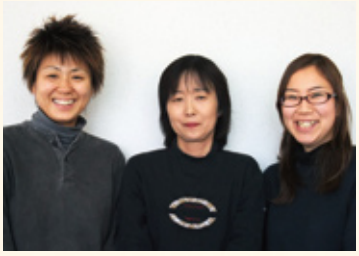
**活動のきっかけ**

“広がれ食育の輪、保護者とともに”をテーマに、栽培活動のひとつとして。

**活動のねらい**

- 親子で栽培することで、家庭での食への意識の向上につなげる。
- 苗を育てることで、愛情や思いやりの気持ちを養い、調理して食べることで食べものへの感謝の気持ちを持つ。
- 栽培を通して身近な環境の取り組みに気づく。

## あきらめず世話を続ける子どもの姿に感動し励まされた



（左から）古川 光世先生／辻林 はやみ先生
玉田 美希先生

去年までは園の菜園で「凛々子」を栽培していましたが、食育活動は収穫の喜びを親子で味わうことも重要だと考え、今年は一人一鉢にし、ある程度まで園で育てた苗を、家庭に持ち帰ってもらおうと考え栽培を始めました。そこで、保護者と一緒に苗を植えたり、米のとぎ汁を家庭から持参してもらって水やりをしたりと、保護者も「凛々子」の生長に関心を持てるように取り組みました。

実がついて、いよいよ家庭に持ち帰ろうとしていた矢先に、次々と尻腐れ症が発生。私たち保育士は「収穫は無理かな？」とあきらめかけましたが、子どもたちは粘り強く世話を続け、その姿は私たちを励ましてくれました。最終的にたくさん収穫できたのは子どもたちの力だと思います。「凛々子」を大切に思う気持ちが芽生えたからこそ、最後まであきらめなかったのでしょう。

**活動ハイライト**

収穫したトマトの数だけ紙で作った「凛々子」を収穫表に貼り付けて記録。

大事に育てたトマトで作る料理は格別！手作りのケチャップをウインナードッグにのせて。

**愛知県岡崎市立**
**上地小学校**
**2年生／132名**

テーマ

# 野菜への愛着と食への関心を高める

## 活動のきっかけ

学校が掲げる食育活動の一環として、さまざまな野菜とともに「凛々子」を栽培。

## 活動のねらい

- 野菜を育てる中で、土にふれ、継続して世話をし、野菜に愛着を持つ。
- 野菜を収穫して調理し味わうことで、旬を知り、食への関心を高める。

## 授業も栽培活動も初めて。凛々子の栽培は発見の毎日！

磯谷 みどり先生

私は初任者なので、授業も栽培も始めてでした。定植の際に、学区内の農家の方を「野菜名人」として招き、野菜の植え方や世話の仕方を教えていただきました。子どもたちは名人に教えてもらったことをもとに、世話の仕方を本や家族に聞いて調べ、追肥や支柱立てなどの作業を行いました。こうした世話を積み重ねたことで、子どもたちは野菜への愛着を深めていったのだと思います。

収穫祭では、野菜が苦手な子どもがギョーザピザに野菜をたくさん乗せて食べ、これには本人も周囲も驚いていました。以前、命の大切さを考える道徳の授業をしたのですが、食べながら「本当に生きているものの命をいただいているんだね」と発言する子どももいました。自分で育てた野菜を調理したからこそ、食への関心も高まったのだと思います。

### 活動ハイライト

収穫期を迎えても「トマトが赤くならない」という友達の悩みを解決するため、みんなで知恵を出し合った。

収穫した野菜をどう料理するかを話し合い、野菜サラダとギョーザピザを作って収穫祭を開いた。

**愛知県一宮市立**
**北方小学校**
**特別支援学級**
**2・4年生／3名**

テーマ

# おいしいトマトを育てよう

## 活動のきっかけ

野菜嫌いなうえ、栽培活動に興味が薄い子どもたちの栽培への関心を抱かせるため

## 活動のねらい

- 学年や障害が異なるクラスの友達と一緒にトマトの世話を行う。
- トマトの生長を自分なりに記録する。
- 収穫したトマトを調理しておいしく味わい、好き嫌いをなくす。

## 障害がある子も自分で作業。体で感じる栽培の喜び

甲田 智子先生／池村 理恵子先生

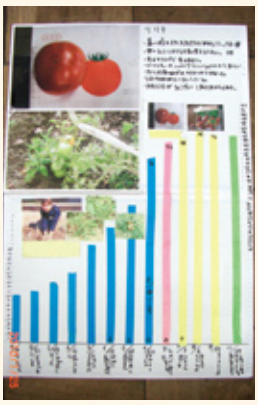
子どもたちの障害に合わせながら、なるべく自分でできる作業は体験させるようにしました。たとえば、車椅子の児童は座らせて土に触れながら定植したり、観察記録に使う紙テープの裏面に貼った両面テープをはがしやすくして持たせるなど、子ども自身が作業したことを実感できるように工夫しました。

「トマトの身体測定」では、紙テープを使って草丈や実の大きさを測り、それをグラフにして目に見えるようにしたことで、子どもたちは苗の生長を実感し、「凛々子」に愛着を持ち、収穫を楽しみにするようになりました。

今回の受賞で全校児童の前で表彰していただき、子どもたちは学習のがんばりを認められて自信がついたようで、とてもうれしく思っています。

### 活動ハイライト

12月。未熟なトマトを収穫し、追熟したトマトを使って全員でビーフカレー作り。トマトが嫌いな子もおいしく味わえた。



週に一度「トマトの身体検査の日」として観察した。紙テープを使った棒グラフで、生長が視覚的にわかる観察記録。

**青森県平川市立**
**小和森小学校**
**2年生／25名**

テーマ

# 凛々子って、人？トマト？

## 活動のきっかけ

近隣の小学校で、「凛々子」を調理する家庭科の研究授業を見て。

## 活動のねらい

- 野菜を栽培して、成長や収穫の喜びを体得し、食に関する関心や意欲を持たせる。
- 国語科の作文学習として、野菜の生長や自分の活動を振り返りながら作文を書き、お世話になった人へ感謝する気持ちを育てる。

## マンネリ化した栽培活動を珍しい「凛々子」で再生

葛西 美智子先生

従来2年生ではミニトマトを栽培していましたが、味の想像がつくからか、子どもたちの収穫への期待はあまり高くありませんでした。昨年、近くの小学校の研究授業で「凛々子」を知り「加工用ってどんな味なのだろう?」と、私自身とても興味がわきました。きっと「凛々子」ならば子どもたちも食べてみたいだろうと思い、興味を持って育てるのではないかと考え、栽培を決めました。

そして、苗との出会いの日。苗を箱に入れたまま子どもたちに見せ、においをかいだり、「凛々子」という名前がついていることを教えたりして、子どもたちの想像力を刺激すると「人みたいな名前だね」、「どんな味がするのかな?」と興味津々。珍しい「凛々子」を育てて食べてみたいという意欲につながりました。

初めての栽培で心配が尽きませんでしたが、JAの方に土作りから栽培指導までいろいろとサポートしていただき、とても感謝しています。

### 活動ハイライト

6月。栽培で気になる点をJAの野菜指導員の方に質問。

10月。「凛々子」を鉢から出して、根や茎を観察しながら最後の観察シートに記入。

**静岡県静岡市立**
**清水小島小学校**
**1～6年生／184名**

テーマ

# 「たてわりトマト」大作戦

## 活動のきっかけ

遊びに偏りがちな、たてわり班活動の活性化の一環として

## 活動のねらい

- たてわり班活動に栽培活動を取り入れることで、異学年交流を活性化する。
- 栽培途中で発生した問題認識から、オリジナル商品を作って販売するという課題に挑戦。

## 自分で育てたトマトを売ろう！6年生の声を実現

竹内 明仁先生

本校は小規模校のため、たてわり班活動は重要な異学年交流の場ですが、これまでは遊び中心でした。栽培活動は子どもたちにも「収穫」というゴールが見えるため、細かい計画は立てずに子どもたちに任せることにして、初めて栽培活動をたてわり班活動に取り入れました。

収穫期にトマトがバラバラに熟す様子を見て、全校で一緒に味わうことは難しいと感じた6年生から「収穫したトマトを全部合わせて調理し、多くの人に食べてもらおう」と意見が出て、オリジナル商品をPTAの納涼祭で販売することになりました。商品開発では、ケチャップに使うスパイスが揃わなかったり何度も試作したりと苦労していましたが、納涼祭ではオムレツ60食分とトマトジュース6リットルを販売し、わずか1時間で完売する人気でした。たてわり班活動から商品開発・販売へと発展し、子どもたちの活動の様子を地域に発信するよい機会となりました。

### 活動ハイライト

4月。たてわり班で定植。願いをこめて1本ずつに名前を付けた。

PTAの納涼祭で児童が手作りしたケチャップをかけたオムレツとトマトジュースを販売！